

近江商人の知恵と理念を現代に生かす情報紙

さんぽう

三方よし

第29号

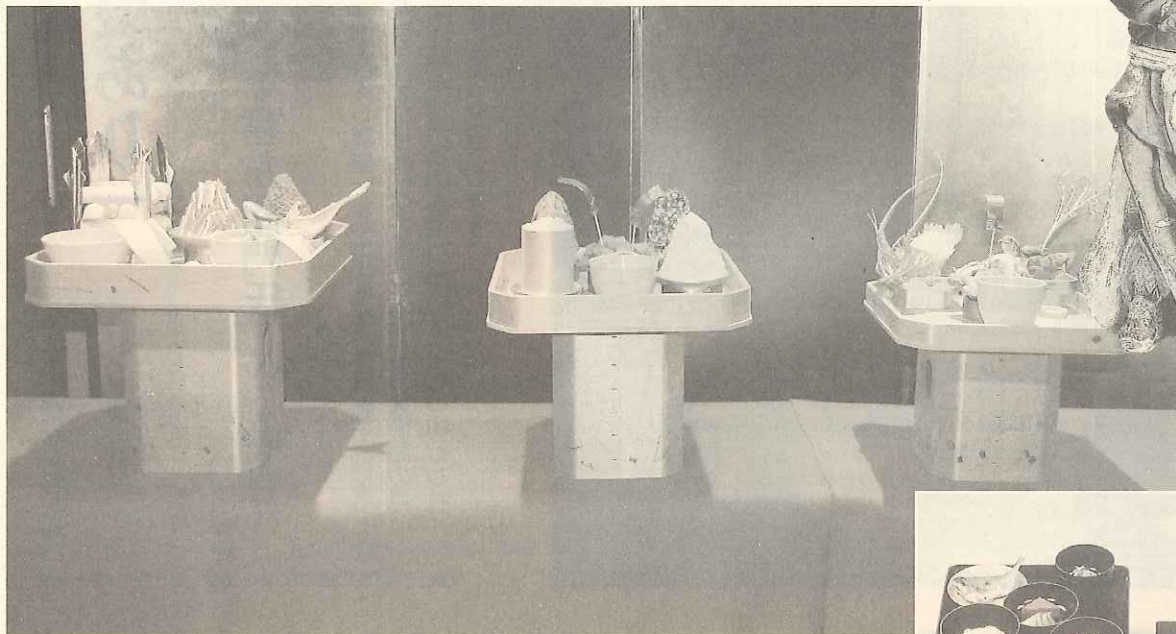
2007/12

CONTENTS

第19回なるほど三方よし講座より 2

塚本喜左衛門氏講演 / 「積善の家に余慶あり」

「先代塚本喜左衛門氏にみる企業家精神」 窪田和美 6



通信使や上々官の饗応料理 (写真はすべて近江八幡市立資料館提供)



朝鮮通信使の瓦人形



下官の料理

～朝鮮通信使来日400周年～

「朝鮮通信使と近江商人の関係？」

今年、海を越えてやってきた使節団・朝鮮通信使が来日してから400年という記念すべき年です。その痕跡の残る地域では当時の行列が実現されるなど、数々のイベントが催されました。滋賀県でも、野洲から彦根までの「朝鮮人街道」を歩く催しや、近江八幡市立資料館で、通信使をモチーフにした八幡瓦人形や宿割絵図などの展示が行われました。

朝鮮通信使は1607年(慶長12)から12回来日し、うち10回近江を通ったとされています。その使節団の人数は400～500人という非常に大規模なもので、一行はソウルを出発し釜山より海路で対馬から瀬戸内海、淀川から京都へ到着、その後は陸路で中山道・東海道を通過し江戸を目指しました。総距離は約2000kmに及び、往復で約1年もの歳月を費やしたと言われています。

この一行の長い旅路の中で、彼らの接待場所は宿泊地と

昼食休憩地に分けて定められました。近江では守山・彦根が宿泊地、大津・近江八幡が昼食休憩地でした。八幡での昼食休憩では、市内の本願寺八幡別院が通信使のうち三使や上々官クラス、街道筋の寺や町人屋敷は下官などの休憩先となり、その準備や接待当日にかかわる多くの記録が残されています。

ところで、「朝鮮人街道」は、全長約41km、中山道の脇街道にあたります。こちらを通ったのは、関ヶ原の合戦で勝利を収めた徳川家康が上洛する際にこの街道を通ったことから、この縁起の良い吉道を通行させることで通信使への優遇ぶりを表そうとしたという有力説の他、参勤交代など大名行列とのち合わせを避けるため、繁盛している近江八幡の町を朝鮮の人たちに見せ、一行のために近江商人に大金を使わせようとしたためといった説もあります。

当時の昼食の饗応料理の復元をご覧ください。近江商人説も有力な説だと納得させられます。

第十九回なるほど三方よし講座より

「積善の家に余慶あり」

塚喜商事株式会社

塚本喜左衛門氏 氏(六代目)



毎年好評をいただいている「なるほど三方よし講座」を本年は初めて京都で開催。九月三十日、紅葉の時期には大勢の見物客で賑わう東福寺と重森三玲庭園美術館の見学として、重森三玲氏と関わりが深い塚本喜左衛門氏の講演の集いは盛況の中行われました。本紙では当日の塚本氏のお話の要旨をお伝えします。

塚本喜左衛門氏

1948年生。五個荘出身の近江商人6代目。着物、宝飾、毛皮の製造卸のほか、貸衣装業や賃貸不動産部門の事業展開を行う。塚本家の家訓「積善の家に、必ず余慶がある」をベースに、重森三玲庭園美術館の再生をはじめとする地域貢献や日韓交流事業に取り組む。

重森三玲と招喜庵

今みなさんがおられるこの建物は、造園家重森三玲さんがお住まいされていたものです。もともと吉田神社の社家の鈴鹿家であったものを重森三玲さんが買い取られ改修されましたので、三玲さんの独自のセンスが随所に見られます。このたび、庭園部分は現状維持をそして住居部分の表面的なデザイン意匠は三玲さんのセンスを生かすことに務め、双方のコラボレーションで保存再生しました。

先に東福寺のお庭をご覧いただきましたが、三玲さんの意匠には斬新でありながら格別の精神的な訴えを感じられます。この建物にも個性豊かなデザインが至るところに潜んでいます。現状維持を試みた庭園部分は文化財に登録されていますが、指定を受けていないこの住居部分の方が実は古い建物なのです。

ツカキの商い「三分法の訓え」

私の名前塚本喜左衛門は代々襲名され、この名前から「塚喜」といふ商号が生まれ、今年で創業一四〇周年を迎えました。扱う商品は、着物のほか、宝石と宝飾、眼鏡・毛皮製品やハンドバッグですが、主力は着物で売

り上げの半分をしめます。そして新しくウエディングの部門がスタートしました。

着物と宝石と毛皮の共通項は、素材が天然のもので、非常に上質なレアであり、希少性のあるということがあげられます。そして加工技術は日本やヨーロッパの伝統技術に裏付けられたものに基点をおき、少なくとも工業製品とはしない方針としています。

さらに高額商品ですから、デザインが比較的本格的であるということも、着物・宝石・毛皮などの共通点です。年配でお金にゆとりのある方がお客さまなので販売チャネルは、百貨店、外商、専門店チェーンとなり、シナジー効果を狙って、三つの分野で成り立つかたちを心がけています。

商品と同様に財産の考え方も同様です。塚本の家では、天災やパニックに備えよと言われてきました。つまり近江商人みな共通ですが三分法の教えを心がけてきました。元来「家の身上は、現預金、土地、株と三つに割っとくものやで」と年寄りはこのように言います。財産の中心を三つに割って考えます。商売でも拠点を割ったり、投資の通貨を割ったり、本業自身も割

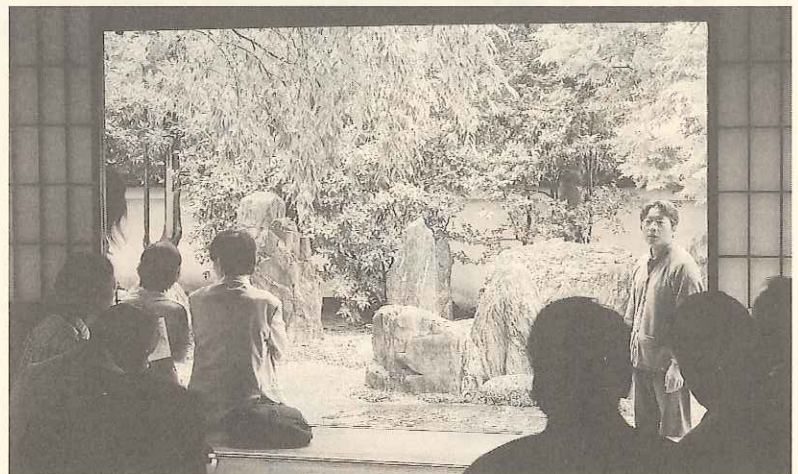


東福寺方丈庭園

禅宗の方丈には古くから多くの名園が残されてきたが、四周に庭園をめぐらせたものは東福寺唯一の試みで、この方丈庭園は1938年（昭和13）、重森三玲氏が釈迦成道を表現して作庭。八相の庭と命名され、近代禅宗庭園の代表として広く世界各国に紹介されている。

重森三玲庭園美術館

京都吉田神社の社家鈴鹿家の所有であったものを、昭和18年（1943）に東福寺方丈庭園などの作庭で知られる、庭園家の重森三玲が譲り受けた。現在の重森三玲旧宅は、これら江戸期の建造物のほか、三玲が新たに自ら設計して建てさせた、二つの茶席と、自作の書院前庭や茶庭、坪庭がつけられている。書院、茶室は国の登録文化財。



ったり、いろいろなかたちで三つに割って安定するかたちを求めようということだと思いません。

「三方よし」の考え方

三方よしといわれるものうち、「世間よし」は、積極的にいいことを行い社会貢献をしていこうという近江商人の考え方です。「売り手よし」から始めると、「先に売り手よしか、何か利己主義やな」とか、「買い手よし、世間よしって、世間体は商人やから大事にするだろう」といって冷やかす人がいます。

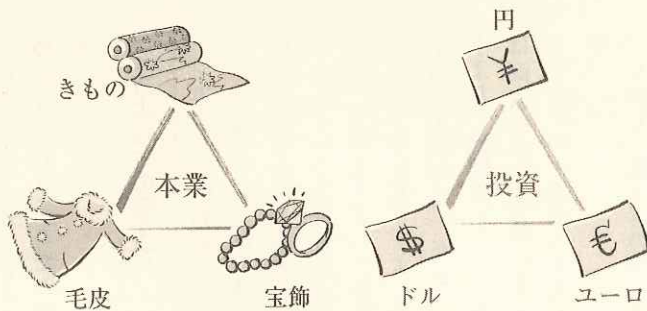
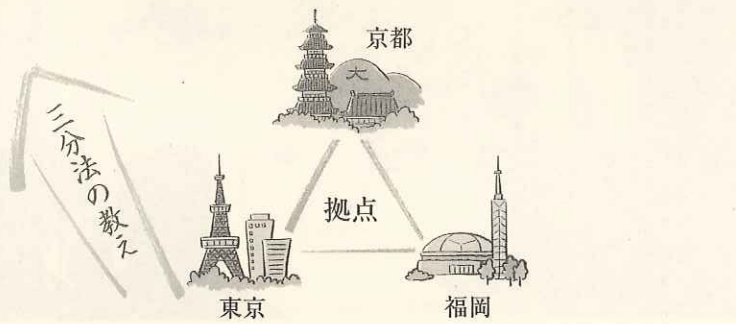
しかし、売り手のそろばんをさちつと合わせて、人に依存しない、自分の責任を持てるかたちで商売をしない。責任を持てないのなら最初から商売しなさんなということですよ。

「買い手よし」お客さまに喜んでもらえなかったら、売り手よしなんかあったことではありません。お客さまよしというのは絶対の話です。しかも、お客さんにリアルに喜んでもらえることとプラス、将来的にも長いかたちでお客さんに喜んでいただけるような商売をしなければならぬということですよ。そして「世間よし」は、そんなことを

通じてお客さまのお役に立つように頑張ろうとすることです。役に立たない商売などというのは、やはり社会貢献を指すような、積極的なことをしていこうというのが、三方よしの考え方だと解釈しております。

非常に身近な話ですが今、着物が売れない時代です、すると産地は疲弊します。これではいけないと産地が元気になる仕掛けを行っています。加賀友禅で有名な金沢では、加賀女流作家新作競技会を開催し、その作品を全部買い取っています。いいものをつくらうという作家のみなさんががんばり、売れ筋だけの作品ではないものが生まれてきます。少しは産地のためになるかと思っています。

一方、毛皮を中心にカナダフェアを十一年間続けています。カナダではビーバーという水生動物が増えず森林資源がだめになるという事態になっています。そこで、この動物を間引く意味もあり毛皮にしてはどうかと思つたのです。しかしビーバーの毛皮は厚いので、細くカットして編んで、軽い毛皮づくりを目指して、この加工をナメシが上手なイヌイット（エスキモ）にお願ひすることになりま



した。狩猟民族のイヌイットは今、仕事がありません。補助金漬けにするのはよくないというので、カナダ政府も仕事の援助には協力的で、伝統技術を生かす仕事に応援いただき、カナダフェアには大使館も協力してくれます。これらは、あとでつけた理屈ではなく、自然に話が進んだのです。これを工賃が安いだけの理由で中国にもついでと話は減茶苦茶になります。何らかのかたちで社会貢献的な切

り口を目指す、おのずと盛り上がってきます。こうしたことが「積善の家に、余慶あり」ということだと思えます。特別によい行いをするという特殊なこととは考えていません。

現実感のある事業を

着物などとは別に、不動産事業も行っています。倒産後十年ぐらい経った古いビルを購入しないかという話があり、解体料を差し引いてもらって買いまし

た。周囲はマンションだらけの中、思案した結果、マンションームばかりの建物にすることにしました。わずか一坪程度の部屋をたくさんつくり、トイレは一つだけ、一室八千円程度のこのトランクルームは好評で、すぐに埋まりました。新築なら採算に合わなかったのですが、中古ビルを買ってマンション群の中に作ったトランクルームは、人びとの生活の現実的な問題解決となったのだと思います。つまり、ちょっと人と違うことを、現実感を持っていろいろなことをチャレンジしていくと、思いがけない展開が広がると思うのです。

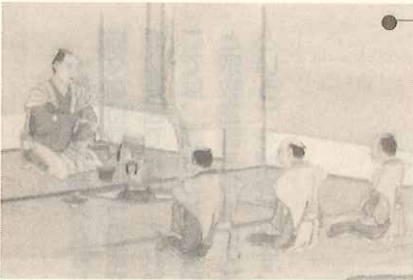
チャレンジといえば、韓国との文化交流も同じようなことがあります。近江は大陸の文化の影響を多く受けています。たとえば石塔寺がそうです。いろいろな文化が大陸から半島を経て、若狭の沖を経て、ちようど琵琶湖の湖東あたりを経由し、信楽から奈良へ流れました。近江は、明らかにシルクロードの一環にあると思います。

東アジアが文化と環境面で一体ではないかと思えます。韓国のチマチョゴリという李王朝時代の衣装が日本に来て、十二単、さらには現在の日本文化として



三代目

家業が破たん。乞食になり、赤犬に吠えたてられている



二代目

仕事もしないで、自分の楽しみごとにつつまめかしている



創業者

大汗をかきながら夫が炭俵を担ぎ、こぼれた粉炭を妻が練っている



三代の図

定着した着物があります。こうした背景から、韓国に着物と十二単を持ち込み、李王朝のチマチヨゴリでファッションショーをしたのですが、大変好評を得ました。

「謙虚に精進して勤勉質素であれ」

私が子どもの頃、よく聞かされた話が、五個荘金堂の自宅に

ある掛け軸に描かれた三つの絵のことです。一番下は創業者です。炭俵をつくっています。炭を切って集まる炭の粉でタドンをつくっているようです。二つ目が、お茶会のようなものです。近江商人は、たしなみごとに対してずいぶん警戒的ですが、事業を伸ばしていこうとするとたしなみ事も必要です。しかし、あ

まり熱中しすぎると商人としてのバイタリティーや生々しさが抜けてしまい、結局は最後の絵のように乞食になると戒めています。なかなか難しいバランスだと思います。

今、自分の子どもらに、小さいときによく親から教わったと同様のことをしています。合宿と称して一週間に一回、朝七時半ごろから小一時間ほど早朝ミーティングを行い、競争相手の事例研究など問題意識の共有化を図っています。こうした中で新しい展開ができる力を養ってほしいものです。

ツカキイズム

近江商人は他の藩へ出店し、そこで資本を蓄え、人材を教育し、独自の管理手法でノウハウを高めて、さまざまな蓄積をしてきました。それが明治維新で市場を経済化して、多くの経済人、企業ができました。これには

彦根藩の政策の影響力が大きかったと思います。戦国時代からそろばんを持たせれば必ず抜けた逸材は近江の人でした。井伊家は代々大老職についたという幕府の重鎮です。近江商人の商業活動の後押しになる誘商政策を先んじて行ってきたことが多くの近江商人や近江系企業が誕

生したのだとも思います。

「しまつしてきばる」とか、「商売替無用之事」とか、「利真於勤(りはつとむるにおいてしんなり)」、各近江商人の商家とこのころは、それぞれに一つの理念を持って、頑張ってきたのです。ツカキには、先祖があつて先輩社員がいて、OBの人がたくさんいます。呉服問屋は室町というのが一つの業界という単位なんです。会社を辞めると、みな毎月一回、お一日に集まってくるという習慣があります。退社後にはそれぞれの生活がありますが、お一日の日に来られ、毎月同窓会のように、後輩の指導とか、会社の現状をお聞きになるのです。そのため、わが社の応接間には、代々の先輩の写真を飾っています。

近江商人のものの考え方、DNAを受け継ぎながら商売をやっていく、できるだけ新しいことをしようということになってきます。結果、ハイアットリージェンシーやプリンスホテルと組んで衣装を作ったり、福岡では、東急ストアのショッピングセンターの再生をするなどさまざまなチャレンジをしています。

先代塚本喜左衛門氏にみる企業家精神

執筆 龍谷大学 窪田 和美

三方よし研究所
今年度のテーマ

「老舗に学ぶ」

一般に近江商人と呼称されても、時代と地域と扱う商品により様々な特徴がみられます。そして話題にされるのは、近江商人の成功要因であり、これをめぐって諸説が唱えられてきました。ここでは、戦後の社会変貌に直面したにも関わらず、独自の価値観と宗教意識を持った先代の塚本喜左衛門氏（以下、先代喜左衛門という）を紹介します。



5代目 塚本喜左衛門

1908年、近江八幡の尾賀亀次郎の四男として生まれる。1921年に養子となり、第三高等学校、京都帝国大学を経て、1933年に塚喜商店に入店。商いを満州にまで広めるが1940年に陸軍に入隊し、以降6年半、中国を転戦した。戦後1947年に商売を再興。1949年8月1日に塚喜商店株式会社を設立する。

呉服の現金卸に邁進し、東京、札幌、福岡へと業務を拡張。1984年に会長となり、2000年、91歳で逝去

窪田和美氏

龍谷大学准教授。専門分野は社会学、消費社会論、ジェンダー論。主な著書に『近江商人の里・五個荘—その伝統と現在—』（口羽益生編・行路社、1997）収録「企業家精神と宗教意識」、論文に「近江日野商人と報徳運動」2004年『龍谷大学論集』第463号、「近江日野商人と石門心学」2005年『龍谷大学論集』第466号、「真宗寺院における住職と坊守の役割—第8回宗勢基本調査からみる坊守の多面的活動—」2006年『龍谷大学論集』第468号、「北関東における近江日野商人と酒造業—宗教倫理と経済的社会的な—」2006年『仏教文化研究所紀要』第45集がある。1951年京都府生まれ。

苦難に遭遇した際、心の拠り所となった宗教。

塚本喜左衛門家は、滋賀県東近江市五個荘金堂町に存在する商家である。かつての神崎郡南五個荘村と北五個荘村は、近江商人を多数輩出したことで知られた地域である。白壁の土蔵と広大な屋敷を舟板塀で囲った景観は、手入れの行き届いた落ち着いた町並みを創りだしている。しかも、いずれも良質の材料を使っているため商家として品の良さを感じさせる。五個荘の金堂とは、そのような地域である。約十五年前、当時八十歳をいくつか超えた先代喜左衛門氏は、自身の生涯を振り返って、苦難に遭遇した際、心の拠り所となったのは宗教であったと語ってくれた。以下のエピソードから、近江商人である彼の企業家精神を探ることにしたい。

養父母の信仰態度に接することが、家業精励への動機付けとなる。

先代喜左衛門が、塚本家に跡継ぎとして来たのが小学校卒業直後、すでに旧制膳所中学への進学が決まっていた。叔母の嫁ぎ先である商家の養子となったが、当初実父は反対であった。

商家の跡継ぎとしての責任の重さと家を潰すことになるかも知れず、この子が不憫だと言った。しかし喜左衛門家の当主は、「ただ先祖の守をしてくれるだけでよいから」と懇願したので、生まれ故郷である八幡から、五個荘へやって来た。

京都の店から旧制三高・京大に通っている頃、篤信者であった養父母は、毎朝の本山（東本願寺）へのお参りと総会所で開かれる説教師の法話にも参加していた。そのような養父母の信仰態度に接することが、先祖祭祀だけでなく、家業精励への動機付けともなった。そして自ら、学校の休暇時には従業員と共に全国の得意先回りを始めたのである。

入隊をきっかけに、さらに信仰を深める。

京都の商家出身の妻と結婚して、商売は両親と家族中心の経営で順調に発展していた矢先の昭和十四（一九三九）年、役場から先代喜左衛門に応召の通知が届いた。まさに予期せぬ出来事であり、三十一歳で戦地への状況から戦禍拡大を予測したのは、妻と幼子二人と両親を残して、商売を中断して戦闘に向

かうことであった。三十一歳での出征は、明らかに帰還は困難であり、死に向かつて進むことのように思われた。

このとき、迷いを克服するため日夜の本山参拝を励行して、法話の聴聞に総会所に通い詰めたのである。入隊までの二十日間は朝の勤行、昼と夜の法話に献身的な行動を続けた。そしてこのことが信仰を深めるきっかけとなった。

配属部隊の上官の薦めで南京の主計部隊に転属となり、これで「命拾いができた」と実感したが、終戦までの六年間をここで過ごすことになった。

時代の変化を読み戦後の経済復興を学ぶため、勤め人を選択。

帰還したのは昭和二十一年（一九四六）年、外部と全く接触のない六年間は、一般社会に戻ってきて戸惑いの連続であった。そこで戦後の経済変化を知るため、酒造会社に経理の仕事を得たのである。かつての商家の主が、勤め人として雇用されることを選んだ。しかし家業を廃業したわけではなく、時代の変化を読み戦後の経済復興を学ぶためにという目的があった。このような目的意識にもとづく柔軟な思考が、高度経済成長期



東近江市五個荘金堂町（重要伝統的建造物群保存地区）の一角にあるツカキグループ社長、塚本喜左衛門氏の本宅は明治初年頃築。母屋と離れと庭、三つの蔵からなり、付近の町並みととけあって、近江商人の歴史と心意気を醸し出している。

に企業として飛躍を遂げることに繋がっていくのである。

従業員も次第に帰還してきたので、昭和二十四（一九四九）年に個人商店から株式会社にして家業を復興させた。このときこれまでの伝統的商法をうち破る方策を採用している。その後会社経営は、順調に進展したが養母の死と自身が病に冒されていることが判明し、母を思い、自分の病気を告げずに闘病生活に入ったことで母の最期を看取ることはできなかつた。そして彼自身は約半年間の闘病生活を余儀なくされた。

宗教には家業継承をめざすため商家同族団（別家会）の紐帯機能があった。

これら困難をどのように克服したのか、先代喜左衛門は次のように語ってくれた。第一に、元来病弱だった妻の豊富な医学知識が幸いして病気の早期発見に繋がった。第二に、有能な医師に巡り会えたということ。第三には、術後三年間は体調の安定と規則正しい生活を励行し、食事に配慮したこと。そして精神的安定を求めて信仰に大きなウェイトを置く生活を始めたというのである。

その信仰生活にはひたむきなものがあつた。朝夕の勤行に始

まり、毎日二時間くらい仏典を讀むこと、そして毎月朔日に開催する別家会には仏典の解説をしてきた。「功労者の碑」に眠る会社の従業員の命日には、法要と墓参を欠かさず、会社と自宅におかれている日常の仏壇の世話もすべて先代喜左衛門が行っていた。

このように先代喜左衛門にとって、宗教は次の三つを柱として意味づけられる。一つは、家の系譜的連続を願う先祖祭祀を中心とした家の宗教としてとらえることである。先祖祭祀を行うことが当主の責務であるという考え方が貫かれている。一つには、家業継承を目的とする商家同族団（別家会）の紐帯機能というところである。会社という形態をとっているが意識の面では企業一家意識であり、それは従業員のための墓「功労者の碑」に墓参することと確認される。そして三つには、先代喜左衛門個人にとつての宗教、主体的な生き方を求める人生の指針としての生きがい、あるいは哲学としての宗教である。

信仰している宗教を実生活の中に反映させた先代喜左衛門。

先代喜左衛門が、生活の信条にしているのは、「奢った生活

をしないこと」であるという。そのために、いつも自身に言い聞かせているのは、次のような言葉であつた。

「冥見に恥じず、冥加を尊び、冥利をわかまえる」

冥見に恥じずとは、いつもどこかで神仏に見られている、見守られているという自己反省の心を持つこと。したがって公明正大な道を歩むことを信条としている。冥加を尊びというのは、知らず知らずのうちに受けている神仏の加護を思つて、謙虚な心を持ち自己反省をする。例えば、このようなものを載せて、果たして私にその資格があるだろうかと問い、先祖に対する感謝の心を持つこと。そして冥利をわかまえるとは、仏恩、神仏から与えられた恩恵を大切に考え、分をわかまえることだという。

このように先代喜左衛門は、戦後の激動期から高度経済成長期を通じて、合理的思考と効率第一主義で企業経営に専心してきた。そしてその企業家精神は、信仰している宗教を実生活の中に反映させるというみごとな生活態度であつた。

財滋賀県産業支援プラザよりイベントのご案内

滋賀県SOHOセミナー

Web3.0 社会とニュービジネス

Web2.0からWeb3.0へ。リアルとネットの垣根が無くなっていくWeb3.0型社会では、ビジネスはどのように変化していくのか。今後のWeb社会の変動とその対

応策について、情報分野に非常に造詣が深い講師がアドバイスします。

とき 平成19年12月17日(月) (13:00~15:00)

講師 神田 敏晶 氏

ところ ビジネスカフェあきんどひろば

(有限会社カンダニュースネットワーク代表取締役)

エルティくさつ 地下1階

<http://kandaknn.googlepages.com/home>

(草津市大路1-1-1 JR草津駅東口すぐ)

定員 30人 (定員になり次第締め切り)

対象 SOHO事業者及び中小企業者等

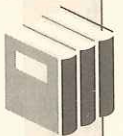
参加費 無料

共催 関西デジタルコンテンツ事業協同組合

●お申し込み先

米原SOHOビジネスオフィス 担当: 島田
TEL: 0749-52-9200 FAX: 0749-52-9211
ホームページ: <http://www.soho-shiga.jp/>

※セミナー終了後(15:00~16:00)に交流会を開催。



近江商人関連書籍のご案内

近江商人の金融活動と滋賀金融小史

淵上清二著
B5判272頁 定価4200円(本体4000円)

CSRの源流三方よし

『近江商人学入門』

末永國紀著
B6判212頁 定価1260円(本体1200円)

『近江商人ものしり帖』

ビジネス成功の源泉「始末してきばる」「もったいない」「世間さま」のこころ

NPO法人三方よし研究所編
新書判144頁 定価840円(本体800円)

北の幸を商品化した近江商人たち

『近江商人と北前船』

サンライズ出版編
B6判180頁 定価1260円(本体1200円)

『近江の商人屋敷と旧街道』

NPO法人三方よし研究所編
A5判128頁 定価1890円(本体1800円)

近江商人家訓撰集

『近江商人の理念』

小倉榮一郎著
A5判136頁 定価1260円(本体1200円)

●この欄で紹介した書籍は三方よし研究所でも販売しています
お申込は、事務局まで(TEL0749-110627)

●定期購読ご希望のみなさまへ
情報紙「三方よし」の定期購読をご希望の方は、送料など手数料相当分800円分の切手を添えてお申し込みください。なお三方よし研究所会員および賛助会員のみなさまには無償で送付いたします。

●NPO法人三方よし研究所
近江商人の経営理念である「三方よし」が現代社会の中での生活規範となるような活動を行っています。詳細は下記事務局までお問い合わせ、またはホームページをご覧ください。情報紙「三方よし」の無償配布および各種講座への割引特典があります。
問い合わせ先 TEL0749-22-0627

てんびん棒

「お前もか」といいたくなるぐらいに食品偽装問題が次々に浮上している昨今、安全第一が優先されるはずの食品だけに社会における反響も大きい。伊勢のおかけ横丁は、伊勢参宮の人の多くが立ち寄り賑わいのまちとして脚光を浴びてきた。そしてこの場所の立案運営が赤福であった。参詣客のおもてなしの見本のような経営は長年の商いの経験と地域性をよく理解した上での、赤福の社会貢献事業であらうと感心していた。賞味期限偽装は許される問題ではないし、その過程も報道で知る限り弁解の余地もなからうが、地域経済活性化に尽力されてきた企業が、もろくも信用が崩壊することに耐えられない思いが残る。企業の商いの信用や信頼を築き上げるためには並ならぬ努力が必要であるが、その失墜は、いとも簡単である。近江商人の多くが失墜の怖さを十分に認識してさまざまな家訓などで経営が磐石であるように戒めてきた。本年は「老舗に学ぶ」をテーマに、なるほど三方よし講座を開催しているが、永年の企業承継への配慮に学びながら、日々反省と改革への意思を強固にすることの必要性を痛感するものである。
★本紙は滋賀県よりの補助金を受けて発行しています。